片桐洋一（かたぎり・よういち）　【編集委員】
1931年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。大阪女子大学名誉教授。主要著書『伊勢物語の研究［研究篇］［資料篇］』（明治書院）『伊勢物語の新研究』（明治書院）『源氏物語以前』（笠間書院）

山本登朗（やまもと・とくろう）　【編集委員】
1949年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。関西大学教授。主要著書『伊勢物語論　文体・主題・享受』（笠間書院）『日本漢詩人選集・菅原道真』（共著・研文出版）『平安文学研究ハンドブック』（共編・和泉書院）

藤島　綾（ふじしま・あや）
1968年生まれ。九州大学大学院博士課程単位取得。主要論文「三条西家流『伊勢物語』注釈の一形態―支子文庫本をめぐって―」（「語文研究」第83号）「『闕疑抄初冠』考」（「語文研究」第85号）

神田裕子（かんだ・ゆうこ）
1970年生まれ。早稲田大学大学院博士課程単位取得。早稲田大学大学院生。主要論文「河野美術館蔵『伊勢物語註　冷泉流』」（『王朝文学の本質と変容　散文編』和泉書院）「『玉水』の作品研究」（「演劇映像」第43号）「古活字本「謡抄」単辺十二行本の書誌学的研究」（「演劇研究センター紀要」III）

鈴木隆司（すずき・たかし）
1970年生まれ。京都大学大学院博士後期課程修了。高知大学助教授。主要論文「在中将集の性質と成立（上）（下）」（『国語国文』67-2,3）、「伊勢物語享受の一側面－新古今集・新勅撰集の伊勢物語歌－」（『国語国文』70-7）。

伊勢物語古注釈大成（いせものがたりこちゅうしゃくたいせい）　第二巻

2005年（平成17）5月30日　初版第1刷発行©

片桐洋一・山本登朗　責任編集

装幀　右澤康之
発行者　池田つや子
発行所　有限会社笠間書院
〒101-0064　東京都千代田区猿楽町2-2-5
☎03-3295-1331㈹　FAX03-3294-0996
振替00110-1-56002

NDC分類 913.32

ISBN4-305-70042-5 C3395
藤原印刷・渡辺製本
乱丁・落丁本はお取りかえいたします。
（本文用紙：中性紙使用）
http://www.kasamashoin.co.jp

れ、かみなんとものこるなるに、これは、そのなこりもなく、女をうしなひたれは、一くちにくひてけりとかきたり。また、かみのなりさはくとは、この御せうとたちの、みつからさはきもとめれは、高人の、かやうにさはき給ふを、神なりさはぐとは、いへり。また、神なりのつほによそへて、神鳴さはきに、えきかすとはかきたるなり。うたには、くちのきもなし。

問、そも〳〵、これは二てう后のいとこの女御のもとに、つかうまつるやうにて、いたまひたりけるを、といへり。さきには、またおほきさいのみやの御もとにをはしますといへり。これは、御おはにてこそおはしますを、いまはまた、いとこのねうとといへるこそ、こゝろえかたけれ。

答、この大きさいのみやの御所を、のちには、ちうじんこうよしふさの御むすめ、そめとのゝきさきに奉給ひしなり。これも、大きさいのみやには、めいにておはしまし き。されは、二てうのきさき、やかてこの御所にとゝまりて、御いとこのそめとのゝきさきに、またつき奉給ひしなり。

問、そも〳〵、くにつねは、あになり。基経は弟なり。こゝに心ゆきて、とらるゝほとにては、いかてかなきはんべるへきなれとも、なりひらに心あはせたりといはんも、むけにねんもなけれは、たゝ非道にとられたるやうにせんとて、なくとはいへり。まことになきたるにはあらす。

七

問、むかし、おとこ、ひんかしくいきけるに、いせ、おはりのあはひのうみつらをゆくに、といへり。まことにくたりけるか、おほつかなし。

答、序にいひけるがごとく、まことにくたりたるところにはあらす。たゝつくり事にしたる、ゐなかくたりと、の給ふへし。さりながらも、物かたりのおもてにつきて、まつくたりたるとの給ふへきなり。

八

問、おとこみをえうなき物におもひなして、京にはおらしといへり。みをえうなきものとは、いかなるこゝろそや。

答、えうと申は、おほやけにつねにつかふまつりけるつかさを申なり。しかるに、なりひらは、右馬頭にて、つねに

問、鬼あるところとはかりいくるこそ、おにのまにもきこゆるに、こゝには、おにはやくちに、くいにけりといくり。されは、まさしく、おにのくひたりけるときこゆるは、いかに。

答、これは、かの后、おにと、ひさしくのたまくるなり。そのゆくは、おには、人をかりもとめてとるかゆくに、とられじとて、人はかならすにけかくるゝなり。しかるに、このきさきゆくに、かりもとむる人々なれは、このせうとたちを、鬼にたとくてのたまくるなり。この、おにといはんとてこそ、おにあるところと、おにのまをかねて、いひをきたり。たゝいひをきたるには、あらすはんべり。

問、さらは、まことのおにならすは、たゝおにとりてけりといへかし。くひてけりといふたにも、ことゝしきに、あまつさへ、一くちにくひてけりと、いへり。一くちのことは、いとふしんなり。

答、鬼といふはとならは、くひてけりといふこそ、たましるもいでくれ。たゝおにとりてけりといふは、むけにおめてきこゆれは、くひてけりといふなり。一くちといふこそ、おにの人をくふにも、をのつから、ちなんともこはの物かたりに、したひにはかゝすして、まつ弟をかきて、のちに大郎くにつね大なこんとかきたるは、いかにそや。

答、弟基経は、長良第三の子にておはしけるを、伯父よしふさの養子にして、摂禄をゆつりて、あまつさへ、わか朝の摂政をはしめて大政大臣までなり給ひし人なれは、弟なれとも、まつ上にかきたり。あにくにつねは、わつかに大なこんまてこそ、なり給ひしかは、のちに書るなり。

問、またげらうにてとは、いくらほとのくらゐにて、おはしけるそや。

答、またげらうとは、いみしくたかつかさもならぬときの事なり。弟はちうなこん、あにはちうじやうにて、おはしましゝときなり。

問、そも〳〵、それほとによふけくらきに、この兄弟二人、なに事によりて、だいりくはまいり給ひけるや。また、おとこも女も、たかひに心行てこそ、とられけめ。それに、さしも人のきくほとは、なきける事よ。これまたこゝろえかたし。

答、基経、くにつね、二人、この事をきゝつ（け）、わさとおいつきて、とりかへしたまくるなり。また、女、おとと

きみにつかふまつるべき人の、この女ゆくに、みをはたしなからつかはされて、きみにもつかふまつらすなりにけれは、ええうをもちなから、きみのえうにあらさりけれは、身ゟえうなき物とはいふなり。うたにはく、

しなのなるあさまのたけにたつけふりをちこち人のみやはとかめぬ

と云へり。このうたは、なにとよめるそや。

答、しなのゝくにのあさまのたけは、いつとなくもえて、けふりたえぬやまなり。このけふりを、をちこちらゝめとよめり。

（一面空白）

右之本も、しかと不知所候へ共、推量にうつし置候。文字、又かなつかひ、ちかひ候共、本のことくにて候まゝ、努々あやまりにては、あるましく候也。

寛永　五月吉日

かきをくもかたみとなれやふてのあと
われはいつくのうらにすむとも

伊勢物語知顕集三

十七

問、むかし、としころをとつれさりける人の、さくらのさかりにみにきたりけれは、あるしのよめる、

あたなりとなにこそたてれさくらはなとしにまれなる人もまちけり

といへり。これは、たれ人のことそ。うたのこゝろは、いかによめるそや。

答、家主は、ありつねかむすめ、まれ人はなりひらなり。

問、これはすてにあひてのゝちか。また、いまたあはぬときのことか。いつくにてありし事そや。

答、これは、夫妻となりてのちに、女いろ〳〵しくて、ふた心ありときゝて、うと〳〵しくなりにけるが、心さしなをわすれすして、またのとしのはる、やどのさくらさかりなるにことよせて、きたりけれは、あるしの女、よめるなり。このうたは、添うたといふものにて、上下のこゝろあり。まつうたのおもてには、さくらは、あたなるはなと、なにたちたれとも、あたならねはこそ、一とせにいちどもきたりかたき人を、ちらすして、まちつけたるらめ、とよめり。また、心のそこに、われをは、こゝろさたまらすと、なをたてゝこそ、すて給ひしかとも、こゝろのさたまりたれはこそ、かき絶えて、としに一どもきたりかたき人を、まちつくるまて、ぬしなくてあるらめ、とよめるなり。これは、六義にとりては、添うたと申くし。添うたといふは、おもてには、おもふ事をさしいたすして、こゝろのそこにこめて、それにさにたる事をおもてによみいだすなり。されは、このうたは、おもてにつきて、『こきんしう』のはるのぶにいりたるなり。このくんかに、

けふこすはあすはゆきとそふりなましきえすはありともはなとみましや

といへり。これ又、をなし添うたなり。このこゝろは、けふ、われきたれはこそ、ちらぬはなとはみれ、けふこすして、あすなともきたらましかは、はなみなちりはてゝ、ゆきふりたるとて見へき。よも、はなとはみし。はなのひさしきにはあらす。われ、はやくきたりたるにこそ、とよめ